



かわいい平屋の一軒家サロン、Sucila Tea 紅茶教室。甲東園の駅から徒歩1分というロケーションにある。



現在の生徒数は約70名、これまでに初級講座を終えた生徒は300人を超える。現在吉田さんはサロンでの紅茶教室のほか、紅茶関係のイベント等での紅茶講師も勤めている。秋からは東京でも教室を開催する予定

Sucila Tea
紅茶教室：Tel. 0798-53-1939
www.happy-tealife.com



右から：茶園スタッフと吉田さん（2点）／苗木植え付け前の茶園。ちょうど整地が終わった状態／そこに茶の苗木を植える。吉田さんの茶園では9千株を植えた／植え付け後10年経ったお茶の木。吉田さんの茶園でこうなるまではまだ数年かかる



オーナーになった経緯はまったくの偶然。たまたま現地の知人経由で持ち込まれた話だったと言う。茶園の管理は元のオーナーが行い、製茶は近くの工場に持ち込むシステム。



閑静な高級住宅地として人気の高い兵庫県西宮市の甲東園。吉田直子さんはここに「スリー紅茶教室」を開き、紅茶の楽しみを伝えている。吉田さんの紅茶教室のモットーは「紅茶の知識やマナーありきではなく、生活の中でのゆとりの時間や人との交流の中での紅茶を伝えること」。その気さくな人柄に見せられ、多くの生徒さんが通ってくる。そんな吉田さんは紅茶好きが高じ、2007年、スリランカ南西部の都市ゴール近郊に10エーカーという広さの茶園を購入したという「茶園オーナー」なのである。現在はちょうど9000株の茶の苗木を植えたところ。写真を見ながら吉田さんは「除草が大変で、なかなか整備が進まないんです」と言うが、「年に3回ほど里帰りのようにのんびりするのために茶園を訪れ、成長を見るのが楽

しみなんです」と実に楽しそう。一般的に茶葉は5年めくくらいから摘めるとはいえ、売り物になるのは10年経ったところから。なぜ、茶園を買ったのかと訊ねると、吉田さんは「夢を買ったようなもの」と微笑んだ。では、吉田さんの見る夢とはどんな夢なのだろうか。吉田さんの紅茶との本格的な関わりはいつからだったのか、「紅茶に関する仕事をしたい」と勤めていた会社を辞め、「紅茶といえば英国」と10ヶ月間渡英したときのこと。吉田さんはロンドンブライムズレーテアミュージアム（現在は閉館）の門を叩き、英語学校を終えた午後、このミュージアムに通い詰めて、仕事を手伝いながら紅茶の勉強をしていた。「ミュージアムでは、3時になると皆仕事を中断して紅茶をいれつつろぎます。どんなに忙しくても仕事に埋没しない自分の時

間をもち、相手のくつろぎの時間を尊重すること。そしてその傍らにはいつも紅茶がありました」。これは、紅茶ミュージアムの人々だけでなく、多くの英国人に共通する姿であったという。そして帰国して紅茶教室を開いた後は、「紅茶をもっと知りたい」という思いから、インドやスリランカなど紅茶の産地を旅するようになり、訪れる先々で紅茶文化に触れることが、吉田さんの紅茶に対する思いを決めることになった。「紅茶に驚くほどの大量の砂糖を入れて飲む地方もありましたし、ベッドで飲むモーニングティーなど、今日の英国ではあまり見られなくなつた、ゆとりある時代の風習を楽しめる地方もありました」。つまり紅茶と場所という横の拡がり、紅茶と時代という縦の拡がりを肌で感じることができたのだ。さらには産地なら

では、風をわたる茶葉の薫りや、地元用の安価だが新鮮な茶葉でいれた紅茶の味わいに、何ともいえない安らぎを覚えた。難しい蘊蓄も特別な作法もなく、場所や時代、人それぞれに、紅茶とともにある豊かな時間。これが吉田さんの夢となつたのだ。「老後は茶園の小高い丘の上に憧れのスタイルのバンガローを建てて、見渡す限り緑の茶園の風景を眺めながらゆつくりお茶を楽しみたい」と語る吉田さん。「紅茶教室の生徒さんも、写真を見ながら少しずつ茶園らしくなっていくのを楽しみにしてくれて、『いつか行つてもいいですか?』と言ってくれます。もう、私だけの夢ではなく、みんなの夢になつていると思うと、茶園を買つてよかったと心の底から思います」。